

# ナチス時代の体制派美術の問題（1）

## 大ドイツ美術展に女性の裸体画を出展した画家の経歴について

安 松 みゆき

### 【概 要】

ナチス時代の「体制派美術」は、ヒトラーの美術観の下に写実性を重視した独自の保守的傾向の美術と見做される。だがいかなる美術的背景から生じたものかは十分に検証されていない。本稿では特徴的な女性の裸体画を大ドイツ美術展に出展した画家達の経歴を洗い出す作業によって美術教育の場や創作の地域性を検討した。コロナ禍で現地調査ができず、作品分析等は今後の課題とし、公開されたデータベースと文献による検討を試みた。

### 【キーワード】

ナチス時代の美術、体制派美術、女性の裸体画、大ドイツ美術展、南ドイツの画家

### はじめに

周知のようにナチス時代のドイツでは、1937年から1944年まで毎年開催された大ドイツ美術展を中心とする美術政策により、いわゆる「体制派美術 artige Kunst」が美術界を支配した。この体制派美術は、ナチスによってアリア文化を体現する真正なドイツ美術と位置づけられ、近代美術に対する弾圧と表裏一体に喧伝されたが、戦後は評価が失墜し、美術としては扱いきれない対象になった。近年、体制派美術を取り上げた複数の展覧会が開かれるなど、研究に向けた新たな展開が見られるが、作品の特質やその成立基盤など、多くの論点を手つかずのままになっている。

一般にこの体制派美術は、写実性を重視した保守的傾向の美術と見做されており、その選別にはヒトラーの保守的な美術観が反映されたと指摘される<sup>1</sup>。確かに大ドイツ美術展の出展作品を俯瞰すると、時代を切り開くような新規性に欠ける印象は否めない。しかし他方では、陰影のないグラフィックな描き方など、単に保守的という言葉では括れない特徴も散見される。とくに女性の裸体画の作品を見ると、アカデミックな裸体画とは異なり、エロティックな印象を喚起するものが見られ、独特の傾向を示している。この傾向は単にナチスの悪趣味に帰されることもあるが、いかなる美術的背景から生じたものかは検証されていない。体制派美術を担った画家たちの多くはナチス時代以前から活動しており、その時期に彼らが有した美術的背景を調べてみる必要がある。

本稿では、体制派美術のなかでも特徴的な女性の裸体画について、大ドイツ美術展の出展作品を描いた画家たちの経歴を洗い出す作業をすすめる。とくに美術教育の場(教育機関や師弟関係)、創作の地域性、ナチス時代以前からの創作活動の連続性などが注目点となろう。コロナ禍で現地調査に支障が生じているため、作品分析や個別の画家の詳細な追跡調査は今後の課題とし、公開

されているデータベースと文献による経歴の把握をすすめる。

## 1 調査方法

大ドイツ美術展の出展作品については、「ナチス政権の美術と美術政策の関する批判的な検討に幅広い史料の基盤を与える」ことを目的として、GDK リサーチ (GDK は大ドイツ美術展 Große Deutsche Kunstausstellung の略号) と称するデータベースが構築され、2011 年から公開されている<sup>2</sup>。作成にあたっては、ドイツ研究振興協会の支援のもと、中央美術史研究所が主幹となり、ベルリンのドイツ歴史博物館およびミュンヘンのハウス・デア・クンストが協働した。中央美術史研究所には大ドイツ美術展当時に撮影された写真が、またドイツ歴史博物館にはベルリン郊外の収蔵庫に展示作品の一部が保存されている。周知のようにハウス・デア・クンスト (1937 年開館、旧称ハウス・デア・ドイチェン・クンスト=ドイツ芸術の館) はまさに大ドイツ美術展の展示の場で、購入者・購入価格の情報を保管していたという。

このデータベースに収録されているのは、8 回の大ドイツ美術展に出展された総数 12550 点の絵画・彫刻・版画の写真と関連情報である<sup>3</sup>。情報のなかには、作者、寸法、技法、テーマとモチーフ (肖像画・風景画では人名・地名)、展示された年代と展示場所、売り立ての価格などの基本情報のほか、作者、購入者、描かれた人物については略歴が付き、当時の図録の掲載箇所なども収録されている。検索機能を用いれば、大ドイツ美術展に出た作品全体を俯瞰しつつ、さまざまな観点で分類したり、傾向を把握することができる。

本論では上記のうち、まず人物像の項目で分類し、つぎに女性の裸体画で検索をかけて提示された作品数が該当作品となる。そしてその作品を制作した画家がどこで活躍していたのかを画家で検索をかけて地理的な側面に注目しつつ確認していくことにする。今回の調査では、画家の経歴が主な対象だが、GDK リサーチには簡単な経歴と、外部のデータベースへのリンク情報しか掲載されていないので、別途調査が必要になる。大ドイツ美術展以前の画業については、美術館の収蔵作品の調査や、美術雑誌、展覧会図録、作品集など広汎な文献調査が必要であり、美術教育については教育機関が保管する記録類を見る必要もあろう。しかし現状ではドイツへの渡航それ自体が不可能であるため、まず概略を把握することを目的として、美術家の情報を包括的に掲載する文献を中心に検討を進める。具体的には、『ザウル総覧芸術家事典』と、第三帝国の美術を扱うモルティマー・G・ダヴィドソンの『第三帝国美術』、また地域についてミュンヘンとその近郊の重要性が浮かび上がるので、ブルックマン・ミュンヘン芸術事典として刊行された『19 世紀ミュンヘンの画家』(全 4 巻: 1~4 巻)『19・20 世紀ミュンヘンの画家』(全 2 巻: 5、6 巻)を参照する<sup>4</sup>。『19 世紀ミュンヘンの画家』と『19・20 世紀ミュンヘンの画家』は一連の刊行物と見なされているため、巻数は連番で表記されている。

## 2 大ドイツ美術展に展示された女性の裸体画の画家に関するデータ分析

### 2.1. データ分析の結果 対象数

今回の考察対象となる裸体画の画家について、以下のようにキーワードをあげてデータを抽出した。

人物画>女性の裸体画

まず人物画全体は 980 点だったが、女性の裸体画をキーワードにすることで 301 点まで絞られた。さらにこの作品数から次のキーワードを用いて以下の分類を行った。

女性の裸体画>南ドイツの画家

その結果導き出された作品数は、126 点となった。その数値は 301 点の全体数に対して半数近

くを占める割合である。さらに126の点数は、ミュンヘンの画家による作品が106点と、ミュンヘン以外の南ドイツの画家による作品が20点とに分けることができる。つまり南ドイツの画家の作品と言うときには、その大半がミュンヘンで活躍した画家によるということになる。つぎに126点の作品を制作した具体的な画家は、総計49名を数えた。そのうちミュンヘンを拠点とする画家は38名で、ミュンヘン以外の南ドイツの画家は11名となった。画家の数からすると、全体のおよそ五分の四の割合がミュンヘンを拠点する画家であり、ミュンヘン以外の南ドイツの画家は、およそ五分の一の割合となった。

このように、女性の裸体画は、南ドイツで活躍した画家によるものが多く、南ドイツもその大半はミュンヘンで活躍した画家によることがわかる。

## 2.2. 展示回数と画家

つぎに南ドイツの画家による女性の裸体画が、大ドイツ美術展に何点展示されたのかを見ることにしたい。この展覧会の展示作品は、ヒトラーの意向に沿う選考委員会によって選別されているので、選ばれた作品数は、ナチスの芸術観への適合の度合いを一定程度反映していると見なしうる。

展示回数が最も多かったのは、エルンスト・リーバーマン Ernst Liebermann で13回を数えた。つづいてヨハン・シュルト Johann Schult の12回、ギスベルト・パルミエ Gisbert Palmie の9回、コンラード・プファウ Conrad Pfau の8回、リヒャルト・クライン Richard Klein の7回となった。当時の最高峰の画家に位置していたアドルフ・ツィーグラール Adolf Ziegler は5回を数えた。同様の回数がコンスタンティン・ゲアハルディングー Constantin Gerhardinger にも認められたが、この画家は南ドイツで活躍しており、以後の考察で注目していく。4回はゼップ・ヒルツ Sepp Hiltz、リヒャルト・ヘイマン Richard Heymann の2名、3回はエルヴィン・クニール Erwin Knirr、カール・ヨゼフ・バウアー Carl Josef Bauer、エミール・フォン・ハラヴァンヤ Emile von Hallavanya、ルドルフ・ニッスル Rudolf Nissl、カール・シュヴァルバハ Carl Schwalbach の5名、2回はカール・ブロス Carl Bloss、パウル・パドゥア Paul Padua、トニ・ロート Toni Roth、エドゥアルド・ヴィンクラー Eduard Winkler、フリードリヒ・ヴィルヘルム・カルプ Friedrich Wilhelm Kalb、エーリヒ・エーラー Erich Erler、フランツ・ヴァイス Franz Weiss の7名、それ以外は1回のみでの展示になった。

この展示作品数のデータから、女性の裸体画において大ドイツ美術展の選考委員に高く評価された画家を挙げるとすれば、自らが選考を主導したツィーグラールの作品点数がひとつの目安となるだろう。画家の展示回数からすると、当時の芸術界の頂点に君臨していた画家ツィーグラールが5回であることは、展示回数が5回以上とは相当に多い回数であり、大変評価が高かったと理解しうるだろう。具体的にはツィーグラールの他、リーバーマン、シュルト、パルミエ、プファウ、クライン、ゲアハルディングーを加えた7名の画家が該当する。

## 3 女性の裸体画が展示された画家の経歴

女性の裸体画の画家について、絵画教育や創作活動の場などの経歴関係の情報を整え、作品の特徴に関する従来の評価について概略を把握する作業に移ることにする。既述のように今回の調査では、諸般の事情から概括的な把握まですすめるので、1節にとりあげた基本文献から情報を集める。対象とする画家は、全体の傾向を見るため、大ドイツ展における女性のヌードを複数回以上出展した画家に範囲を広げる。

### 3.1 展示回数の多い画家の経歴について エルンスト・リーバーマン<sup>5</sup>

最も展示数の多かったリーバーマンは、1869年5月9日に中部ドイツ、テューリンゲン地方

のランゲミュス (マイニンゲン近郊) に生まれたが、1960年2月11日にポイアーベルク (南ドイツの上部バイエルン) で亡くなっている。教育は1886年にニュルンベルクの芸術工芸学校で学び、その後4年間ベルリンでリトグラフ作家として活躍したのち、ベルリンの芸術工芸学校で4年間、そしてベルリン造形芸術アカデミーで1890年から3年間ヴォルデマール・フリードリヒ Woldemar Friedrich、フランツ・スカルビナ Franz Skarbina、ヨゼフ・ショイレンベルク Josef Scheurenberg のもとで学んだ<sup>6</sup>。その後イタリアやパリに留学する。1897年からミュンヘンでイラストレーターとして仕事を始め、1904年にはグリム童話の絵本『かえるの王様』の挿絵を、1925年には童話作家アルベルト・ジクストゥス Albert Sixtus の『雲の王様』の挿絵を担当する。その後印象主義的な作風の肖像画や女性の裸体画、風景画を制作しており、その代表的な作例としてエアフルト郊外のキルヒハイムにあるザンクト・ラウレンティウス教会の天井画(1898年)があげられる。リーバーマンは、ナチス時代になると多くの女性の裸体画を制作して、ヒトラーお気に入りの画家の一人となったことはすでに指摘されているところである<sup>7</sup>。

### 3.2. ヨハン・シュルト<sup>8</sup>

次に多いシュルトは、1889年2月28日に北ドイツ、メクレンブルクのキルヒ・イエザールに生まれたことが知られている。しかし美術教育の場所は南ドイツで、ミュンヘンの造形芸術アカデミーに1906年10月9日に18歳で入学したことが記録に残っており、1908年から1911年までアンゲロ・ヤンク Angelo Jank の指導によるマイスタークラスで学んでいる<sup>9</sup>。第一次大戦では捕虜としてロシアの収容所に収容された。1931年から第三帝国の雑誌『ブレンネッセル Die Brennessel』で働いていたという<sup>10</sup>。また彼の女性の裸体画はナチスのイデオロギーの影響を受けていると指摘されている。死没の年代や場所は不詳とされる。

### 3.3. ギスベルト・パルミエ<sup>11</sup>

パルミエは1897年11月19日にミュンヘンに生まれている。かれの父親シャルル・パルミエ Charles Palmie もまた画家でミュンヘンで風景画や静物画の画家として活躍した。母親も花を得意とする画家であり、工芸家でもあったという。このように画家一家に生まれたギスベルト・パルミエは、ミュンヘンの造形芸術アカデミーに進学し、アドルフ・ヘンゲラー Adolf Hengeler とルートヴィヒ・フォン・ヘルテリヒ Ludwig von Herterich のもとで学ぶ<sup>12</sup>。肖像画を得意として、主に品のある女性像が多いが、工場で働く労働者も描いた。その後、アルプスに近いガルミッシュ＝パルテンキルヒェンに居を移しても多くの肖像画を描いたことが知られ、とくに代表作として音楽家リヒャルト・シュトラウス Richard Strauss の肖像画があげられる。戦後になるとアメリカの軍人等の肖像画の依頼を受けて描いていたことから、1957年にアメリカのジョージア州に移住し、肖像画家として活躍したとされる<sup>13</sup>。特に有名なのが、ケネディ大統領、アメリカ将軍ジョージ・パットン の肖像画などである。1986年4月21日にカンディンスキーが住んでいたことで知られる南ドイツのムルナウで亡くなっている。

### 3.4. コンラード・プファウ<sup>14</sup>

プファウは、1885年1月4日にドイツ西南部のネッカー河沿いのヴィンプフェンに生まれ、1954年9月22日にミュンヘンで亡くなっている。シュトラスブルクとデュッセルドルフで予備的教育を受けてからミュンヘン造形芸術アカデミーに1913年から在籍し、ペーター・フォン・ハルム Peter von Halm と カール・フォン・マール Carl von Marr のもとで学んだ。人物や静物を描く画家として、ヒトラーが評価したヴィルヘルム・ライブル Wilhelm Leibl にインスピレーションを受けた作品を制作している。1941年からは南ドイツのバード・キッシンゲンに暮らし、戦後になると再びミュンヘンに戻っている。かれの静物画は、カール・シュフ Karl Schuch を彷彿とし、風景画は印象派的とされる<sup>15</sup>。

### 3.5. リヒャルト・クライン<sup>16</sup>

クラインは1890年1月7日にミュンヘンで生まれ、1967年7月31日に上部バイエルンのヴェスリンクで亡くなっている。彫刻と漆喰の専門学校で学んだあと、6年間漆喰職人として活動していたが、1908年からミュンヘン造形芸術アカデミーでバルタザール・シュミット Balthasar Schmitt、ヤンク、フランツ・フォン・シュトゥック Franz von Stuck に師事した。1917年からミュンヘンにアトリエを構えた<sup>17</sup>。1919年からミュンヘンの分離派のメンバーとなった。1928年にはミュンヘンの州立応用美術学校の教授に呼ばれ、1935年に同学校長にまで昇格している。第三帝国時には画家だけでなく、メダル制作者として評価を高め、むしろこちらのほうが称賛された<sup>18</sup>。かれの絵画には部分的にセザンヌの影響が認められるという<sup>19</sup>。

### 3.6. アドルフ・ツィーグラール<sup>20</sup>

ツィーグラールはいわずと知れたナチスを代表する画家である。1892年10月16日に北ドイツのブレーメンに生まれ、1959年9月19日に南ドイツのバーデン・バーデンのヴァルンハルトで亡くなっている。母親はカッセルやワイマールの城を設計したヴォルフという建築家一族出身であったことが知られる。大ドイツ美術展に出品した当時はミュンヘン在住であった<sup>21</sup>。

ツィーグラールはヒトラー時代の芸術の頂点となる帝国造形芸術院の会長に1936年就任した。その権力によって、近代美術をドイツの美術館から排除する原動力となった退廃美術展を実施した。画家としての教育歴を見ると、ワイマール造形芸術大学に3学期通学し、その後ミュンヘンの造形芸術アカデミーに移って、ヤンクの素描クラスに通った。またカール・カスパー Karl Casper にも師事したとされる。第一次大戦では兵士として出征した。その後もまたアカデミーに戻り、カスパーのクラスで学び1924年に卒業した<sup>22</sup>。1924年から33年まで、ミュンヘンでフリーの画家となり、保守的な市民層が購入する作品を描いていた。1934年から1943年までアカデミーの常任教授に就任した。ツィーグラールは、第三帝国のイデオロギーを具現した画家のひとりであり、女性の再生を、アレゴリーあるいは神話によって高められた裸体画で表現することが、彼の芸術の核となっていたといわれる。政治的な美術としてかれは最もこの時代を代表し、プロトタイプと見做されながら、形式的には、社会の無名人々に冷徹な視線を注ぎ即物的に描く、ノイエ・ザッハリヒカイト Neue Sachlichkeit (新即物主義) であると指摘されている。またマニエリスム様式とする指摘も認められる<sup>23</sup>。

### 3.7. コンスタンティン・ゲアハルディンガー<sup>24</sup>

1888年7月31日にミュンヘンに生まれ、1970年3月11日に南ドイツのテールヴァンクで亡くなる。ミュンヘンの工芸学校で素描を学んだのち、アカデミーでヤンク、ヘンゲラーのもとで勉学を続ける。1907年にはすでに作品が売買され、1914年にミュンヘンのピナコテークに購入された<sup>25</sup>。第一次大戦時には従軍画家として活躍し、その後イタリア、ダルマティア、エジプトを旅行して、ミュンヘンの国際現代美術展となる水晶宮での展覧会に展示されるようになる。南ドイツのキームゼー (湖) に魅せられて夏にはフラウエン・インゼル (女島) やローゼンハイムの風景を題材にして作品を制作する。その後、ローゼンハイムの近郊に居を移し、1937年に描いた《手》の作品がパリの国際美術展でゴールドメダルを受賞した。1939年にはミュンヘンのアカデミーの教授に就任した。戦後は、ミュンヘンの芸術家協会の代表となり、没後1981年にも展覧会が開かれるほど、戦後の芸術をリードした。かれの作品にはライブル、シュフの影響が認められる。資料によると政治的にはナチスに否定的だったが、時代のなかで関係せずにはいられなかった。ナチス時代に地元のギャラリーの設立に寄進することもあったことがその一例といえる。しかし、ゲッベルスより新聞に記事を掲載してはならないとの達しを受け、教授の肩書きも剥奪されていたという<sup>26</sup>。

### 3.8. ゼップ・ヒルツ<sup>27</sup>

1906年10月22日に南ドイツのオーバー・バイエルンのバード・アイブリンクに生まれた。大ドイツ美術展に出展した1938年から44年にかけても、同地の居住が確認されている。父親ゲオルク・ヒルツ Georg Hilz は画家で教会修復者だったため、父親のところで絵画の教育を受けたという。ローゼンハイムの画家のための職業機関で古い巨匠の模写を行った。1921年から27年の間に、ミュンヘン応用美術学校とモーリッツ・ヘイマン Moritz Heymann の個人教室に通った。1930年からライプルのスタイルで農民の生活を描いた作品を制作したとされる。ナチス時代にはヒトラー好みの画家だったといわれ、確かに作品はヒトラーが購入している。しかもヒトラーは、1939年にヒルツのアトリエをつくるために10万帝国マルクを援助した。1938年にはレンバハ賞を受賞している<sup>28</sup>。第二次世界大戦後、戦争で被災した教会の絵画の修復を実施している。また1950年に地元のバード・アイブリンク芸術協会の設立会員になったが、1956年に絵を描くことをやめて<sup>29</sup>、1967年9月30日にバード・アイブリンクで亡くなる。

### 3.9. リヒャルト・ヘイマン<sup>30</sup>

ヘイマンは1900年に中部ドイツのザクセンのロスヴァインに生まれ、1973年に亡くなっている。没した場所は不明である。ガラス工房で学んだあとに、第一次大戦後の1920年から24年までミュンヘン造形芸術アカデミーでロベルト・エンゲル Robert Engel に指導を受け、26年からはドレスデンアカデミーでマックス・フェルトバウアー Max Feldbauer のもとで学ぶ。かれの作品の明るさは、ドイツの印象派の画家マックス・リーバーマン Max Liebermann、ロヴィス・コリンツ Lovis Corinth、マックス・スレフォクト Max Slevogt が関係しているといわれている<sup>31</sup>。1930年からミュンヘンに居を定め、大ドイツ美術展に作品が展示された1944年の間はミュンヘン在住が確認されている。

### 3.10. エルヴィン・クニール<sup>32</sup>

クニールは1894年8月30日にミュンヘンに生まれ、1973年9月19日に南ドイツのシャフトラッハ・アム・テーゲルンゼーで亡くなっている。画家だった父親ハインリヒ・クニールのもとで基礎を学び、1912年10月31日にミュンヘン造形芸術アカデミーの素描クラスに入学したのち、ヤンクのもとで14年まで学ぶ<sup>33</sup>。第一次大戦が終わり、シュトゥットガルトアカデミーで勉強が継続され、ミュンヘンでもマールのもとで学びを続ける。人物や肖像画、風景画、静物画を描いており、初期は後期印象派的な表現をとり<sup>34</sup>、また明るい色彩から印象派の画家と見做されている<sup>35</sup>。

### 3.11. カール・ヨゼフ・パウアー<sup>36</sup>

パウアーは1868年7月7日にシュトゥットガルトに生まれ、1942年5月6日にミュンヘンで亡くなった。シュトゥットガルトの芸術学校で学び、ミュンヘン造形芸術アカデミーでヴィルヘルム・フォン・リンデンシュミット Wilhelm von Lindenschmitt に師事する。1893年にパリに滞在し、その後1895年からミュンヘンを活動の場とし画家、イラストレーターとして活躍する。歴史的な人物画を得意とし、ヒトラーの肖像画も描いている。1938年にはゲーテメダルを受賞している。

### 3.12 エミール・フォン・ハラヴァンヤ<sup>37</sup>

ハラヴァンヤは、1874年1月26日にクロアチアのプーラ・イストリアで生まれ、1960年4月20日にミュンヘンで亡くなったオーストリアの画家である。グラーツで素描を学んでから、1893年にミュンヘンの女子アカデミーでヘルテリヒに師事し、1894年にオーストリアのグラーツに戻る。その後イタリアとパリに遊学する。1909年、ミュンヘンに近いキームゼーのフラウエン・インゼルにつくられた芸術家コロニーのメンバーになり、そこに移り住む。ミュンヘン

ンの女子アカデミーで1911年から1920年まで教員として教育に携わった。女性や子供の肖像画を描き、動物や静物も対象としている<sup>38</sup>。彼女の描き方はノイエ・ザッハリヒカイトに近く、カール・ホーファー Carl Hofer の描き方を彷彿とさせるといわれる。1905年から分離派の展覧会に展示され、1940年にはミュンヘンの芸術協会でも出品された。彼女の手本となったのはライプブルとされる。

### 3.13. ルドルフ・ニッスル<sup>39</sup>

ニッスルは1870年4月13日にティロルのフューゲンに生まれ、1955年10月2日にミュンヘンに没した。インスブルックで州立工芸学校に通い、1887年から89年の間ルードヴィヒ・シュミット・ロイテ Ludwig Schmid-Reutte の絵画クラスに学んだ<sup>40</sup>。そして1889年から1892年までミュンヘンのアカデミーのヘルテリヒ、ルードヴィヒ・フォン・レフツ Ludwig von Löfftz、パウル・ヘッカー Paul Hoecker のもとで学ぶ。その後亡くなるまでミュンヘンに住む。1895年からミュンヘンとウィーンの分離派のメンバーとなり活躍した。インテリア、静物画、女性の裸体画、肖像画、風景画、風俗画を描いた<sup>41</sup>。絵画様式は17世紀のオランダ美術から、ライプブル派、そしてノイエ・ザッハリヒカイトに達するものと指摘されている<sup>42</sup>。

### 3.14. カール・シュヴァルバハ<sup>43</sup>

シュヴァルバハは、1885年5月18日にマインツに生まれ、1983年10月31日にミュンヘンで亡くなっている。工芸家の息子であるカールはマインツの芸術工芸学校に通い、1904年から1908年までミュンヘンの造形芸術アカデミーのマイスタークラスでガブリエル・フォン・ハックル Gabriel von Hackl とマールのもとで学び、ミュンヘンで活躍する。1927年にバイエルンの教授のタイトルを獲得し、1933年にはニュルンベルクのアルブレヒト・デューラー賞を受賞する。かれの手本となったのは、ルネサンス時代のレオナルド、ボッティチェリのほか、近代のマレー、トーマ、ホドラーとされる<sup>44</sup>。

### 3.15. カール・ブロス<sup>45</sup>

ブロスは1860年11月24日にマンハイムに生まれ、1941年11月19日にミュンヘンで亡くなっている。肖像、風俗、風景画家として知られる。1878年から80年にカールスルーエの美術工芸学校で学び、その後カールスルーエ造形芸術アカデミーでカール・ホフ Karl Hoff に1881年から83年まで師事する。その後、1883年から1887年までミュンヘン造形芸術アカデミーで ヴィルヘルム・フォン・リンデンシュミットに学んでいる。ミュンヘンの新しい芸術を求める美術協会であるリトポルト・グループの一員で<sup>46</sup>、1902年からミュンヘン造形芸術アカデミー教授に招聘される。1884年にはアカデミーメダルを、1905年にはミュンヘン大ゴールドメダルを、1937年にはレンバハ賞を受賞している。肖像画だけでなく、風景画と室内画を描き、分離派につながっている。印象派の強調する特徴を持つリアリズムの様式も指摘されている<sup>47</sup>。

### 3.16. パウル・パドゥア<sup>48</sup>

パドゥアは1903年11月15日にザルツブルクに生まれ、1981年8月22日に南ドイツのテューゲルンゼーで亡くなっている。絵画を独学ですすめ、初期の作品には、ヒトラーが評価したリアリストのライプブルから強く影響を受けていたという。その後半の作品では、ノイエ・ザッハリヒカイトの傾向を示し<sup>49</sup>、1922年にはミュンヘン芸術家協会の会員となる。1928年にはゲオルク・シヒト賞を、1930年にはアルブレヒト・デューラー賞を、1937年と40年にレンバハ賞を受賞している。1930年代にはミュンヘンの周辺を繰り返し旅行した。1943年にオーストリアのザンクト・ヴォルフガングに住む。1951年にドイツに戻り、指揮者カラヤンなどの肖像画を描いている。

### 3.17. トニ・ロート<sup>50</sup>

ロートは画家、修復家で、1899年2月16日にミュンヘンに芸術家一家のもとに生まれ、南

ドイツのグライフェンベルク・アム・アマゼーで1971年11月12日に亡くなった。父親が画家であり、かれの最初の教師だった。ミュンヘンの工芸学校で、リンデンシュミットのもとで学び、1917年からミュンヘンの造形芸術アカデミーでマールとヤンクのクラスで学んでいる。ラッヘル・ルイシュ Rachel Ruysch に花の描き方も学んでいる。フーゴー・フォン・ハーバーマン Hugo von Habermann の構図クラスで働き、ミュンヘン造形芸術アカデミーの絵画技法の講師となる。同アカデミー教授で印象派的な作風のマックス・デルナー Max Doerner とは交友関係があったという。夏に表現主義の画家オスカー・ココシュカ Oskar Kokoschka の開催するザルツブルクの夏のアカデミーでも教授している<sup>51</sup>。修復ではアウグスブルクのドームやミュンヘンの聖ネポムク教会のフレスコ画を担当した。描き方はユーゲントシュティルに近いとされる。

### 3.18. エドゥアルド・ヴィンクラー<sup>52</sup>

ヴィンクラーは、1884年1月13日にロシアのサンクト・ペテルスブルクに生まれ、1978年1月30日にミュンヘンで亡くなった画家、素描家でグラフィックデザイナーとされる。工場主の息子で、11歳のときにドイツに来て、1901年からニュルンベルクの美術工芸学校ののち、1906年からはミュンヘン造形芸術アカデミーでペーター・ハルムに版画を学ぶものの、すぐに絵画に転向している。ミュンヘンに居を定めるが、1906年から1913年の間には、ドイツ中北部のハルツ山地、バイエルン州のアルトミュールタール、出身地のサンクト・ペテルスブルク、ローマを訪れている。戦後すぐの1945年にミュンヘンでオリジナル銅版画協会の新設に尽力し、自らも改めて銅版画の作品を制作する。主に風景画や人物画などを描くが、日常の生活や宗教的なテーマを好み、19世紀に基盤を持つミュンヘン派につながっていると評されている。1913年には第11回ミュンヘン水晶宮での国際美術展に参加している<sup>53</sup>。

### 3.19. フリードリヒ・ヴィルヘルム・カルブ<sup>54</sup>

カルブは1889年12月25日にミュンヘンに生まれ、1977年10月16日に南ドイツのロタッハ・エゲルン・アム・テゲルンゼーで亡くなった。かれは医者であり画家で素描家だった。1918年ころに芸術に舵を切り、1919年から1921年までミュンヘンの造形芸術アカデミーでカール・ヨハン・ベッカー・グンダール Carl Johann Becker-Gundahl のところで学び、ミュンヘン芸術家協会のメンバーとなる。かれの典型的な作品として、北ドイツの神話やメルヘンをテーマにしたものが多い。

### 3.20. エリッヒ・エルラー<sup>55</sup>

エルラーは1870年12月16日にシュレジエンのフランケンシュタインに生まれ、1946年6月19日にミュンヘンのイザールタールのイッキングで亡くなっている。父親が早くに亡くなったため、ジャーナリストや編者として活躍するも、肝臓を悪くし、スイスのエンガディンで静養する。そこで、ジョヴァンニ・セガンティーニ Giovanni Segantini の作品を知り、セガンティーニの影響を受けた絵画作品を制作しはじめる。1903年からミュンヘンに移り住み、アトリエを構えて、新しい芸術家協会のひとつ「ディ・ショレ Die Scholle」(1899-1911)の一員になって、1901年には現代美術の発表の場である水晶宮の展覧会に作品を出品している。雑誌『デア・ユーゲント』にエクスリプリス(蔵書票)を作成したり、1912年からミュンヘンの分離派のメンバーになって活躍している。壁画や装飾画を牧歌的かつ英雄的な様式で描いたとされる。

### 3.21. フランツ・ヴァイス<sup>56</sup>

ヴァイスは、1903年5月5日にミュンヘンに生まれ、1981年6月1日に南ドイツ・アルゴアのケンプテンで亡くなっている。かれについてはほとんど情報がなく、インターネットのウィキペディアには掲載されているので、それを参考にすると、ミュンヘンで学んだあと、同地にア

トリエを所有して作品を制作していたが、1923年から南ドイツのケンプテンに移っても、元のアトリエはそのままにして制作を続けたという。教育経緯については明確なことはわからない<sup>57</sup>。ケンプテンのビールに関するポスターや市庁舎の壁画なども手がけている。

以上のように、21名の画家について簡単にその経歴を追ってみた。その特徴について次節で確認する。

## 4 データから抽出された画家の特徴

### 4.1. ミュンヘン造形芸術アカデミー出身者の存在感

前節において確認し得た21名の画家においてまず注目されるのは、その多くがミュンヘン造形芸術アカデミーで学んでいることである。具体的にはシュルト、パルミエ、プファウ、クライン、ツィーグラ、ゲアハルディング、ヘイマン、クニール、パウアー、ニッスル、シュヴァルバハ、ブロス、ロート、ヴィンクラー、カルプの15名が該当する。割合でいくと全体の約71%の数値となる。女流画家ハラヴァンヤは、当時のミュンヘンの女子造形芸術アカデミーで学んでいた。

さらにかれらのなかにはアカデミーの教授に就任した者もあり、ゲアハルディング、シュヴァルバハ、ブロス、ロート、ツィーグラの5名である。その数値は全体の23%強にのぼる割合を占める。つまり、女性の裸体画を代表する作品は、ミュンヘンの伝統的なアカデミーの教育が土台となって生み出されているということができる。

つぎに指摘できるのは、アカデミーで学んだ者たちは、同じ教授に重複することが多い点である。クライン、ツィーグラ、ゲアハルディング、パウアー、ロートの5名はヤンクに師事し、プファウ、クニール、シュヴァルバハの3名はマルに、ゲアハルディング、パルミエはヘンゲラーに、ヴィンクラー、プファウはハルムに師事していた<sup>58</sup>。

ここでこれら4名の教授について簡単に経歴を確認する。一番師事者の多かったアカデミーの教授ヤンクは<sup>59</sup>、1868年10月30日にミュンヘンに生まれ、1940年10月9日にミュンヘンで亡くなっている。父親も画家で、個人の絵画学校に通ったのち、1891年から98年までミュンヘン造形芸術アカデミーでルードヴィヒ・フォン・レフツ Ludwig von Löfftz、パウル・ヘッカー Paul Höckerのもとで学んだ。レフツはアカデミー学長になり、印象主義やミュンヘンの分離派に近い様式と見なされた画家である。その影響を受けて、ヤンクも世紀末の雑誌『デア・ユーゲント』あるいは、新しい芸術家グループ「ディ・ショレ」やミュンヘンの分離派の一員となって活躍する。1899年から1907年まで女子アカデミーの教員、1907年からはミュンヘンのアカデミーの教授として教育にも専念している。様々な作品に能力を発揮し、風景、建築、狩猟、乗馬などを題材に作品を制作したという。

つぎに多いマルは<sup>60</sup>、1858年2月14日にアメリカのミルウォーキーに生まれ、1936年12月10日にミュンヘンで亡くなっている。画家になるためにワイマール、ベルリンそして1882年からミュンヘンに居を移し、各地のアカデミーに入り、ミュンヘンではガブリエル・フォン・マックス Gabriel von Max、ヴィルヘルム・フォン・リンデンシュミットに師事した。この二人はリアリズムの様式をすすめ、当時の学長ピロティ Piloty の方向を継続していたといわれる。マルは1890年から1924年までアカデミーの教授として就任し、ミュンヘンの芸術家協会会長、現代美術展覧会となるミュンヘンの水晶宮の展覧会の会長になっていた。

二人の師事者のいたアドルフ・ヘンゲラー Adolf Hengeler は<sup>61</sup>、1863年2月11日に南ドイツのケンプテンに生まれ、1927年12月4日にミュンヘンで亡くなっている。リトグラフを学ん

でから 1881 年にミュンヘンの応用美術学校に学ぶ。1885 年にミュンヘンの造形芸術アカデミーでヨハン・レオハルト・ラーブ Johann Leohard Raab とヴィルヘルム・フォン・ディーツ Wilhelm von Diez に師事した。1912 年からミュンヘンアカデミーの教員となり 1926 年に休職する。かれの作品は、世紀末の特徴をもち、フランツ・フォン・レンバハ Franz von Lenbach、アーノルト・ベックリン Arnold Böcklin、シュトゥックなどからの影響があり、世紀末様式のユーゲントシュティルと見なされている。

最後のペーター・ハルムは<sup>62</sup>、1854 年 12 月 14 日にマインツに生まれ、1923 年 1 月 25 日にミュンヘンに亡くなった。ダルムシュタットの工科大学で学んだのち、1875 年にミュンヘン造形芸術アカデミーに入学し、ラーブのもとで版画の技法を、レフツには絵画を学ぶ。1895 年頃にミュンヘンのアカデミーのラーブの後継者となり、1900 年から 1923 年まで教授に就任した。1906 年、1908 年にオランダに、1914 年にはフィレンツェ、ヴェネツィア、ヴェローナに旅行する。1917 年にはベルリンアカデミーのメンバーとなる。

これら 4 名のアカデミー教員の経歴からは、リアリズムを基盤として伝統的かつアカデミックな特徴を示しつつも、ヤンク、ヘンゲラー、ハルムは当時の新しい動向である世紀末様式、つまり分離派や雑誌『デア・ユーゲント』に関わっていたことがわかる。また、マールの師事した教員のひとりガブリエル・フォン・マックスは、日本の近代洋画家原田直次郎の師事した教員でもあった<sup>63</sup>。マールは 1877 年に入学しているが、原田は 1883 年であり、どこかですれ違うこともあったかもしれない。

なお、画家たちの中には複数の教授に師事する例が見られる。パルミエ、プファウ、クライン、デアハルディンガー、パウアー、ニッスル、シュヴァルバハがそれに該当し、最高 3 名の教授に師事していたのが、ニッスルである。

#### 4.2. 画家の様式傾向

個々の画家の特徴や様式について、今回参照した基本文献がどのように指摘しているのかを整理してみると、世紀末（分離派、ユーゲントシュティル）、印象派、新印象派あるいは象徴主義（セガントーニ）、アール・デコ、19 世紀のミュンヘン派、マニエリスム、そしてノイエ・ザッハリヒカイトがあげられている。世紀末といわれるのはクライン、ニッスル、ブロス、ロート、エルラーの 5 名であり、印象派はクニール、新印象派・象徴主義はエルラー、アール・デコはパウアー、マニエリスムはツィーグララー、ノイエ・ザッハリヒカイトはハラヴァンヤ、パドゥア、ツィーグララーである。

アカデミーで学ぶことは、19 世紀のミュンヘン派、すなわちリアリズムを基盤とする傾向につながることは理解しやすい。保守的で写実性を重視したヒトラーの美術観やナチスの美術政策に適合しやすかったであろう。しかしそれだけでなく、当時の新しい様式に分類される画家が多いことに留意する必要がある。たとえば、印象派はナチスの美術政策において否定されていた。

とりわけ意外なのは、ナチスの否定したはずのノイエ・ザッハリヒカイトに分類される人物がいることである。ノイエ・ザッハリヒカイトは、描き方は写実的であるが、社会の無名人々の内面を描き出すことに特徴があり、ナチの否定した退廃美術を代表する様式として知られている<sup>64</sup>。今回、ナチスに好まれた女性の裸体画の画家ハラヴァンヤとパドゥアは、それに近いと見なされているのである。さらにナチス芸術の頂点に君臨して、退廃美術排斥を押しすすめたツィーグララーの形式もまたノイエ・ザッハリヒカイトと評されていることは見逃せない。

## おわりに

本論では、データベースといくつかの基本文献を資料として、大ドイツ美術展に女性の裸体画の作例を出展した画家に焦点をあてて、経歴と作風に関する調査をすすめた。その結果明らかになったのは以下の点である。1) 当時評価された画家の多くが南ドイツ出身であり、そうでない場合も他から移住してミュンヘン、あるいはミュンヘン郊外など、南ドイツで制作していた。2) かれらの多くがミュンヘンの造形芸術アカデミーで学んでおり、アカデミーの教授になるものも認められた。3) かれらは、アカデミーで学んだが、当時において新しい様式を受け入れて作品を制作する者も少なからず見られ、なかにはナチスが否定したノイエ・ザッハリヒカイトと評される画家も含まれていた。しかもノイエ・ザッハリヒカイトの画家を排斥したツィーグラールの様式が、そのように指摘されていることは、今後の注目点になろう。

今後はこれらの基礎的知見を起点として、大ドイツ美術展の女性の裸体画において大きな存在感を示したミュンヘン、とりわけ同地の造形芸術アカデミーの調査、注目すべき画家に関する個別研究などをすすめる予定である。

本研究は JSPS 科研費 20K00202 の助成を受けてすすめられた。

## Abstrakt

Untersuchung über die artige Kunst unter die Nazi-Zeit (1)

Zu Werdegang von den Malern, die die weiblichen Aktbildern in der Großen Deutschen Kunstausstellung ausgestellt haben  
Miyuki YASUMATSU

Die Kunst in der Nazi-Zeit ist die Artige Kunst genannt. Sie gelten als Kunst mit einer konservativen Tendenz, die den Realismus betont. Hitler hat solche Werke ausgewählt, die den neuen Charakter für die nächsten Zeit fehlt. Insbesondere weibliche Aktbilder erwecken im Gegensatz zu akademischen Akten eine erotischen Eindruck. Es wurde darauf hingewiesen, daß dieser Charakter aus einem schlechten Geschmack der Nazis stammt. Es wurde jedoch nicht untersucht, aus welchem künstlerischen Hintergrund es stammt.

In diesem Artikel wurden die Karriere der Malerin oder Malern untersucht, die auf der Großen Deutschen Kunstausstellung weibliche Aktbilder ausgestellt haben. Dabei wurden die öffentliche Datenbank und grundlegende Literatur benutzt, weil die Untersuchung in Deutschland aufgrund von Covid 19 nicht möglich ist.

---

<sup>1</sup> 関楠生『ヒトラーと退廃芸術—〈退廃芸術展〉と〈大ドイツ芸術展〉』河出書房新社、1992年。『芸術の危機—ヒトラーと〈退廃美術〉』展覧会図録 神奈川県立近代美術館、1995年。 麻生徹「ナチズムと芸術」『DIALOGICA』滋賀大学教育学部倫哲研究室。 [http://www.edu.shiga-u.ac.jp/dept/e\\_ph/dia/4.html#third](http://www.edu.shiga-u.ac.jp/dept/e_ph/dia/4.html#third) (閲覧日 2021年1月12日)

<sup>2</sup> <http://www.gdk-research.de/db/apsisa.dll/ete> (閲覧日 2021年1月12日)

<sup>3</sup> 作品の売買については歴史文書館に、また写真についてはミュンヘン市立文書館、バイエルン州立図書館、バイエルン州立中央文書館からの資料提供を受けている。

<sup>4</sup> Mortimer G. Davidson : *Kunst in Deutschland 1933-1945 Malerei*, Tübingen, 1992. (以下 Mortimer1992と略記) Andreas Nabert, Michael Steppes u. a. : *De Gruyter Allgemeines Künstler-Lexikon, Die Bildenden*

*Künstler aller Zeiten und Völker*, Berlin (以下 AKL と略記。なお巻が異なるために AKL の次に出版年と巻数を記載) Horst Ludwig: *Bruckmanns Lexikon der Münchner Kunst Münchner Maler im 19. Jahrhundert*, München. Horst Ludwig: *Bruckmanns Lexikon der Münchner Kunst Münchner Maler im 19./20. Jahrhundert*, München (副題が異なるが、連番の事典と見なされているため、以下 LMK と略記。なお複数巻で刊行されているので、LMK の次に出版年と巻数を記載)。

<sup>5</sup> Mortimer1992, S.353. AKL 2015, Bd.84, S.397f. LMK1983, Bd.4, S.52.

<sup>6</sup> Mortimer1992, S.353. AKL 2015, Bd.84, S.397f. LMK1983, Bd.4, S.52.

<sup>7</sup> Mortimer1992, S.353.

<sup>8</sup> Mortimer1992, S.419. LMK1994, Bd.6, S.330f.

<sup>9</sup> Mortimer1992, S.419. LMK1994, Bd.6, S.330f.

<sup>10</sup> Mortimer1992, S.419.

<sup>11</sup> Mortimer1992, S.379. LMK1994, Bd.6, S.160f.

<sup>12</sup> Mortimer1992, S.379.

<sup>13</sup> LMK1994, Bd.6, S.160f.

<sup>14</sup> LMK1994, Bd.6, S.176.

<sup>15</sup> LMK1994, Bd.6, S.176.

<sup>16</sup> Mortimer1992, S.336. AKL2014, Bd.80, S.419. LMK1993, Bd.5, S.471f.

<sup>17</sup> AKL2014, Bd.80, S.419. LMK1993, Bd.5, S.471f.

<sup>18</sup> Mortimer1992, S.336. AKL2014, Bd.80, S.419.

<sup>19</sup> LMK1993, Bd.5, S.471f.

<sup>20</sup> Mortimer1992, S.467f. LMK1994, Bd.6, S.508-510.

<sup>21</sup> 「ツィンゲラーのクソ“リアリズム”はイマジネーションも何もない代物」とまで侮蔑される場合がある。ロベルト・S・ヴィストリヒ編『ナチス時代ドイツ人名事典』東洋書林、2002年、138頁。

<sup>22</sup> Mortimer1992, S.467. LMK1983, Bd.4, S.508-510.

<sup>23</sup> Mortimer1992, S.467.

<sup>24</sup> Mortimer1992, S.298. AKL2006, Bd.52, S.116f. LMK1993, Bd.5, S.296f.

<sup>25</sup> Mortimer1992, S.298. AKL2006, Bd.52, S.116f. LMK1993, Bd.5, S.296f.

<sup>26</sup> Mortimer1992, S.298.

<sup>27</sup> Mortimer1992, S.317.

<sup>28</sup> Mortimer1992, S.317.

<sup>29</sup> Wikipedia [https://de.wikipedia.org/wiki/Sepp\\_Hilz](https://de.wikipedia.org/wiki/Sepp_Hilz) Sepp Hilz artroots <http://artroots.com/art2/sepphilzarticle3.htm> (閲覧日 2021年1月12日)

<sup>30</sup> Mortimer1992, S.317. <https://www.arkazia.de/richard-heyman-1900-1973.html> (閲覧日 2021年1月13日)

<sup>31</sup> Mortimer1992, S.317.

<sup>32</sup> AKL2014, Bd.81, S.23f. LMK1993, Bd.5, S.482.

<sup>33</sup> AKL2014, Bd.81, S.23f. 父親はバウハウスのパウル・クレーや日本の影響を受けたエミール・オルリクを教えている。

<sup>34</sup> AKL2014, Bd.81, S.23f.

<sup>35</sup> LMK1993, Bd.5, S.482.

<sup>36</sup> Mortimer1992, S.251. AKL1993, Bd.7, S.550. LMK1981, Bd.1, S.61.

<sup>37</sup> Mortimer1992, S.309. AKL2011, Bd.68, S.250f. LMK1993, Bd.5, S.342. なお学んだ場所が、ミュンヘンの女子造形芸術アカデミーでなく、造形芸術アカデミーとする指摘があるが、本論では詳細な事典とされる

AKL を支持している。

<sup>38</sup> AKL2011, Bd.68, S.250f. LMK1993, Bd.5, S.342.

<sup>39</sup> AKL2016, Bd.92, S.439f. LMK1982, Bd.3, S.228.

<sup>40</sup> AKL2016, Bd.92, S.439f. LMK1982, Bd.3, S.228.

<sup>41</sup> AKL2016, Bd.92, S.439f. LMK1982, Bd.3, S.228.

<sup>42</sup> AKL2016, Bd.92, S.439

<sup>43</sup> Mortimer1992, S.421. LMK1994, Bd.6, S.340-343.

<sup>44</sup> LMK1994, Bd.6, S.340-343.

<sup>45</sup> AKL1995, Bd.11, S.604. LMK1981, Bd.1, S.102.

<sup>46</sup> <https://de.wikipedia.org/wiki/Luitpold-Gruppe> (閲覧日 2021年1月13日)

<sup>47</sup> AKL1995, Bd.11, S.604. LMK1981, Bd.1, S.102.

<sup>48</sup> Mortimer1992, S.378.

<sup>49</sup> Wikipedia [https://de.wikipedia.org/wiki/Paul\\_Mathias\\_Padua](https://de.wikipedia.org/wiki/Paul_Mathias_Padua) (閲覧日 2021年1月12日)

<sup>50</sup> LMK1994, Bd.6, S.242-244. Wikipedia [https://de.wikipedia.org/wiki/Toni\\_Roth](https://de.wikipedia.org/wiki/Toni_Roth) (閲覧日 2021年1月12日)

<sup>51</sup> LMK1994, Bd.6, S.242-244.

<sup>52</sup> LMK1994, Bd.6, S.487. なおアカデミー入学年は LMK の 1905 年は誤りで、1906 年となる。アカデミーの在籍記録での確認による。[https://matrikel.adbk.de/matrikel/mb\\_1884-1920/jahr\\_1906/matrikel-03141](https://matrikel.adbk.de/matrikel/mb_1884-1920/jahr_1906/matrikel-03141) Wikipedia では在籍記録によって 1906 年と記載している。(閲覧日 2021年1月13日)

Wikipedia [https://de.wikipedia.org/wiki/Eduard\\_Winkler\\_\(Künstler\)](https://de.wikipedia.org/wiki/Eduard_Winkler_(Künstler)) (閲覧日 2021年1月13日)

<sup>53</sup> LMK1994, Bd.6, S.487.

<sup>54</sup> Mortimer1992, S.330f. LMK1993, Bd.5, S.444f.

<sup>55</sup> Mortimer1992, S.280. LMK1981, Bd.1, S.304-307.

<sup>56</sup> Wikipedia [https://de.wikipedia.org/wiki/Franz\\_Weiß\\_\(Maler,\\_1903\)](https://de.wikipedia.org/wiki/Franz_Weiß_(Maler,_1903)) (閲覧日 2021年1月13日)

<sup>57</sup> ミュンヘンのアカデミーの在籍記録には同名の入学生はあるものの、年代的に合わない。

<sup>58</sup> なお、重複する教員の事例として、一人で複数の教授に師事することがあり、パルミエ、プファウ、クライン、ゲアハルディングー、パウアー、ニッスル、シュヴァルバハがそれに該当し、最高3名の教授に師事していたのが、ニッスルである。それは、今回アカデミーで学んだ画家には各自の教授の特徴に縛られることなく、共通する根底があるとする理解を促している。

<sup>59</sup> AKL2013, Bd.77, S.293. LMK1982, Bd.2, S.242-245.

<sup>60</sup> AKL2015, Bd.87, S.291. LMK1982, Bd.3, S.113-115.

<sup>61</sup> LMK1982, Bd.2, S.147f.

<sup>62</sup> AKL2011, Bd.68, S.330. LMK1982, Bd.2, S.87f.

<sup>63</sup> 拙稿「解題」『原田先生記念帖』明治美術学会、2015年、33 - 63頁。

<sup>64</sup> Karin Thomas : *Du Mont's kleines Sachwörterbuch zur Kunst des 20. Jahrhunderts , von Anti- Kunst bis Zero* , Köln 1997, S.167f.